

吉田文化会館だより

第 135 号
2021 年 7 月

すぎやまふみの 笠岡市人権講演会 「杉山文野さん」講演録 初めての LGBTQ ～性の多様性と人権～



3月7日に、トランスジェンダーの「杉山文野」さんを講師に迎え、新たな人権課題である LGBTQ について学びました。

まず初めに3つの「性」について考えてみます。1つ目は「体の性」で生物学としての男性と女性で、戸籍に記載される性です。2つ目は「心の性」で「性自認」とも言われ、自分が認識している性です。3つ目が「好きになる性」で「性的指向」とも言われ、恋愛対象となる性です。このように、性は単純に「男女」に分けられるものではなく、いくつかの要素が組み合わされてできています。

LGBTQとは、Lはレズビアンで女性の同性愛者、Gはゲイで男性の同性愛者、Bはバイセクシャルで男性と女性を好きになる人、Tはトランスジェンダーで出生時に割り当てられた性別とは異なる性を生きる人、Qはクエスチョニングで、性的指向や性自認が定まっていない人のことを言います。

LGBTQの人は、人口の5〜8%と推計されていて、左利きの人や、苗字では佐藤・鈴木・高橋・田中さんとはほぼ同じ割合です。「LGBTQの人に会ったことがない」という人も、実際はお住まいの地域で、当事者の人と一緒に暮らしていることを知っていたいただきたいと思っています。なぜなら、当事者は、日常生活で疎外感を感じることが多くあるからです。社会の制度やルール、サービスが「LGBTQの人はこの社会にいない」という前提で作られている、自分たちはここにいないのに、まるでいないかのように扱われているので疎外感を感じているのです。

一方で、企業のサービスで

はLGBTQに配慮した取り組みも生まれています。同性カップルの結婚式や携帯会社の家族割、さらに、生命保険の受け取りや住宅ローンの申込みを同性カップルにも認めるなど、各社がLGBTQ向けのサービスを拡大する動きもあります。

私が取り組んでいる活動を紹介します。今、「東京レインボープライド」という団体の代表をしていて、LGBTQの「プライド・パレード」を運営しています。プライド・パレードというのは、「自分のセクシュアリティに恥じることなく、誇りを持って生きていこう」と1970年にアメリカでスタートして、今では世界中で行われています。

なぜ、このイベントを行うのかというと、年に一度みんなで集まって「私たちはここにいますよ」ってしっかり伝えていかないと、いつまで経ってもいない人になってしまう気がするからです。今では、当事者だけでなく「アライ」といわれるLGBTQを理解し支援してくれる

人たちも参加し、2019年には20万人を超えるまでになりました。昨年はオンラインで開催したところ45万人の参加があり、理解し支援してくれる人が増えてきていると感じています。



プライドパレードの様子

ここで、皆さんに考えていただきたいことがあります。もし、あなたが子どもや友人などの大切な人からカミングアウト（LGBTQの当事者であると打ち明けること）を受けたらどうしますか？大事な点は、カミングアウトすることは「あなたのことを信頼している」という証で、「相手との関係が壊れない」

ことや、「社会的な立場が変わらない」という安心感があることです。ですから、カミングアウトを受けたら、「信頼して話してくれてありがとう」、「何でも話してね」、「間違えてたら教えてね」という3点を意識して相手の話を聞いてください。

LGBTQの理解が広がるために、簡単にできることがあります。それは、「ウエルカミングアウト」といって、皆さんが「カミングアウト、ウエルカムですよ!」と発信することです。例えば、この講演会が終わったら、友だちや家族に「今日、杉山文野って人の話を聞いたよ」とか、SNSでLGBTQの投稿を見たら、「日本でもこの取り組みが進むといいですね!」とリツイートするなど、肯定的な意見を発信してください。すると、皆さんの近くにいるであろう、まだカミングアウトできていない人が、「この人には自分の事を話せる」という安心を得てカミングアウトするきっかけにつながっていくと思います。

最後に皆さんにお伝えしたいことがあります。多様化した現代社会では、自分と違った考え方の人に出会った時こそ、柔軟に対応する適応能力や応用力が求められています。社会の課題という視点で見ると、「持つて生まれた違い」が課題なのか、「違いを受け入れられない社会」が課題なのかというと、私は後者だと思っています。誰一人として同じ人がいないこの社会で、少数派が集まって多数派になっています。ですから、少数派の課題に向き合うことは多数派の課題に向き合うことであり、少数派に優しい社会は、多数派にとっても優しい社会になるのです。

私の話が、LGBTQに限らず、皆さんが様々な人権課題に向き合う時のヒントになればうれしく思います。



笠岡市平和祭

心に響く語りと、名曲でつなぐ感動の物語

～よみ うたい～ ビルマの豎琴

日時 8月15日(日) 14:00～15:30

会場 市民会館

「～よみ うたい～ ビルマの豎琴」は、朗読と音楽が融合することで、物語の情景が目の前に現れ、心に深く響くステージです。

キャスト



朗読・歌・豎琴演奏
田中 あつ子



歌(ソプラノ)
高野 久美子



ピアノ
浜野 千津

演奏曲目 埴生の宿、おぼろ月夜、アベ・マリアほか

過去に公演を見た人の感想

- 歌や楽器の音色が人々の心を動かす。そんな場面に涙が止まりませんでした。歌が人の心を柔らかくする。文化の力で争いのない世界ができないものではないでしょうか。
- 映画を見たことはありましたが、朗読だとまた違う感動があり、一層深い考慮と理解を得ることができました。原作を読み直したくなりました。

※新型コロナウイルスの感染状況により、延期または中止することがあります。その場合はホームページなどでお知らせいたしますので、ご了承ください。

問合せ 人権推進課 ☎69-2120

人権まんが説解

認知症は、誰もがなる可能性のある病気で、令和7年には65歳以上の人の5人に1人が認知症になると予測されています。

認知症の人に見られる

行動に「ひとり歩き」があります。

市では、行方不明になる可能性のある人の情報をあらかじめ登録しておく、もしもの時の早期発見に役立てる「笠岡市認知症ひとり歩き SOS ネットワーク」を運用しています。

行方不明者の発生時には、笠岡警察署に連絡すると市（長寿支援課）を通じてメールの登録者や笠岡放送、社会福祉協議会に情報提供され、皆さんに協力を呼びかけます。

これは、認知症の人が安全で安心できる生活環境の下で暮らしていくため、地域ぐるみで見守り支えていくこうとする取り組みです。

このように、住み慣れた地域で、生活環境や生活習慣などをできるだけ変えずに、これまでと同様に買い物や趣味を楽しむことは安定した暮らしにつながります。そのためにも、市民ひとりひとりが認知症に対する理解を深めて、さまざまな生活の場面で認知症の人をサポートする社会を実現しましょう。

